『東方』三〇六号より

異常な時代の記憶

山田 敬三（神戸大学名誉教授）

二二八から白色テロへ

耳が聴こえず、口も利けない一人の若者が、凶器を持った男たちに列車の中で殺されそうになるシーンが、映画『悲情城市』の中に描かれている。彼は台湾語と日本語による質問に答えられなかったため、大陸から来た外省人だと誤認されたのである。事件の背景になっている一九四七年春、大陸からやってきた中国人であれば、それだけで私刑の対象になった瞬間が戦後の台湾では確かにあったのだ。

この衝撃的な事実は、ヴェネチアの映画祭で、台湾映画としては最初のグランプリを受賞した作品の中で、二二八事件の典型的な側面をつぶさに描写した場面である。この当時、台湾土着の人々（本省人）にとって、日本の敗戦後、大陸から渡来した外省人が、そこまでうとまれ憎悪されていたという、今では信じられないような抗争の実像である。

だが、本省人によるほとんど自然発生的な外省人襲撃は、事件発生の二月二八日から一〇日間とは続かなかった。国民党政府は大陸から呼び寄せた軍隊を使って、今度は事件の関係者に徹底的な弾圧を加え始めたからである。以後、断続的に戒厳令が敷かれ、それは八七年に解除されるまで四〇年にわたって台湾の社会に沈鬱な影を落とすことになる。

二二八事件の二年後には国民党政権が台北に遷都、「一九五〇年の台湾解放」をめざす共産党の地下運動が興起する中で朝鮮戦争が勃発し、白色テロ（赤狩り）が台湾全土を席巻した。本書はこの異常な時代の記憶を発掘し、台湾現代史に刻印しようとするノンフィクションである。

トップページにもどる

藍博洲著／間ふさ子・塩森由岐子・妹尾加代共訳
『幌馬車の歌』
四六判・二八二頁・草風館・二、九四〇円

映画の虚構

映画は日本の第二次世界大戦への全面的な降伏宣言である昭和天皇の「玉音放送」に始まり、中国国民党が中国共産党との闘いに敗れて南京から台北へ遷都した四九年一二月までを時代背景に設定する。しかし、描かれている事実の中には明らかに五〇年代の、左翼分子に対する国民党の白色テロが含まれている。

政治犯が夜明けに監獄から連れ出され、銃殺される時に、周りの囚人たちが一斉に『幌馬車の唄』を歌う場面。町を追われた若者たちが理想を追って山中で共同生活をしながら、ほどなく官憲の手で一斉に摘発される場面。……これらはいずれも白色テロの現実であって、二二八事件とはか

かわりがない。つまり、映画の制作者たちは、当時の政治的な環境に配慮しながら、同じ民族の内部に生じた不幸な事件を一つのものとして、映画の中で描写したのである。

台湾では長い間、二二八や白色テロに触れることはタブーであった。しかし、戒厳令が解除(八七年七月)され、蔣経国の死去によって政権が本省人の李登輝に移る(八八年一月)という時代の変化を見すえながら、ニューシネマの旗手侯孝賢は、あえて積年のタブーを映画のテーマに選んだ。といっても、事実をそのまま描くことはまだ危険であった。そのため、映画のプロットは事実と架空をないまぜにしながら、あえて難解に構成されている。当時の事情を知らない観客には誤解さえ招きかねない。

『幌馬車の歌』

この映画のテキストが、陳映真の主宰する雑誌『人間』八八年九月と一〇月(第三五・三六期)に掲載された『幌馬車之歌』である。作者の藍博洲は事件関係者の重い口をこじ開けるようにしてインタビューを繰り返し、その聞き取りを丹念に記録しながら、同時に自ら探索した史料をそこに挿入し、「語り」を接続する形式でノンフィクションを構成した。

それは九一年に時報文化出版企業有限公司から「この書を五〇年代白色テロの犠牲者、受難者及びその遺族に謹んで捧げ、あわせて彼らが献身した民族解放事業に敬意を表する」という献辞を記して出版され、版を重ねた。作者はその後も調査を継続し、二〇〇四年一〇月に改めて増訂版を刊行した。後者は章立て、文字数ともに前作のほぼ二倍に加筆されている。今回、草風館から出版された『幌馬車の歌』はこの増訂版の全訳である。

トップページにもどる

本書の訳者たちは、前作に対しても訳本を出している。彼女たちは七〇年代から、福岡で「現代中国語講座」に関与し、そのグループの作業として『幌馬車の歌』を九七年三月に出版した。といっても、ワープロ入力による手刷りの印刷物で世間一般の目に触れることはほとんどなかった。しかし、事実上の監修者であり、本書の「解説」を担当した横地剛は、その後も著者や陳映真と密接に連絡を取り、協同して二二八関係の史料発掘を継続しながら、その成果を本書の訳業にすべて盛込んだ。

八九年にグランプリを受賞した『悲情城市』は、この八八年の旧作を底本に、呉念真と朱天文が脚本を書き、侯孝賢の監督で作成された映画である。日本では受賞の事実だけがセンセーショナルに先行する中、田村志津枝が地道な探索を続けて『悲情城市の人びと』を一九九二年に晶文社から上梓した。そこでも明らかにされているように、題目となっている歌の原作は一九三〇年代の日本で流行した『幌馬車の唄』である。

なぜ、『幌馬車の唄』か?

『幌馬車の唄』は『日本の詩情』(阿部徳二郎・今井巌共編、全音楽譜出版社)によれば、一九三二年、「山田としを作詞、原野為二作曲、松平晃唄」で発表され、三〇年代の日本で流行した歌曲である。ただし、田村の調査では最初の歌手が和田春子、三五年には松原操(ミス・コロンビア)と桜井健二であり、松平晃が歌ったのは『急げ幌馬車』(三四年)の方である。それはまぎれもなく日本の流行歌である。

だが、田村の質問に対して、中国共産党による「台湾解放」を最後まで信じて処刑された鍾浩東(基隆中学校校長)と同じころ捕えられ、処刑の日に『幌馬車の唄』で鍾を送っ

た洪某と蔣碧玉（鍾浩東夫人）は、『幌馬車の唄』のメロディをどこかの国の民謡だと思いこんでいる。そのころの台湾文化が日本色に染め上げられていたとしても、それが作詞・作曲ともに日本人だと知っていたならば、大陸で五年余にわたる抗日ゲリラに参加した鍾校長が自らのレクイエムにそれを選んだとは思えない。大きな誤解があったのである。

ただ、当時の台湾で、台湾の人々が日本の歌を歌うことは普遍的な現実であった。日本の旧植民地時代、学校教育の場で現地の言語を使用することは禁じられ、音楽の時間には文部省唱歌が強制された。巷に流行する歌の多くも日本伝来の歌謡であったという。日本の文化はそこまで台湾社会を浸食していたのである。台湾の人々が今日に至るも日本文化に愛着をもっている事実と、そうした事態を歴史的に作り出した政治の暴力とを混同して、台湾の親日感情に無邪気な共感を示すことは許されないであろう。

「語り」の意味

原作、映画ともに一九四〇年代の台湾が経験した異常な時代を形象化し映像化しているのであるが、読者（観客）はそこから時代と切り結んだ若者たちの魂の軌跡をなぞることになる。鍾浩東とその仲間たちは、しょせん時代の流れに棹さすことはできず、結果的には作者のいう「犠牲者」になる道を選び取ることになった。

かつての日本で、ゾルゲや尾崎秀実がソ連による世界平和の実現に献身しようとして散華したように、当事者の祈求と現実との間には個人の力ではどうすることもできない乖離が生じた。しかし、戦後初期の台湾社会には、民衆の最も誠実な園丁になろうとするならば、そうしなければとどまることのできないような現実があった。

トップページにもどる

藍博洲はそうした社会の現実とそれに対する個人の抗いを、生存者の「語り」と官憲の史料をつないでノンフィクションとする方法を選んだのである。「歴史形成の主体である民衆とは一人一人の自分であり、自分が自分の歴史を書く自分史の実践こそ、歴史的自覚を促す契機である」と、「自分史」の提唱者である色川大吉は記しているが、作者は五〇年代台湾の良心を、その当事者に替わる自分史の形式を借りて形象化したともいえよう。

なお、台湾郷土文学の父といわれる鍾理和は、この物語の中心人物である鍾浩東と同年齢の異母兄弟であり、各章の出だしはすべて彼の作品や日記から引用されている。作者はそこに台湾で生まれ育った中国人のアイデンティティを見ようとしているのかも知れない。